



もいおかYMCA ニュース



サタデースクール開校！！



いいかい？卵の黄身はこうしてとるんだよ。あとからみんなにやってもらうからね。(太田リーダー)

もいおかYMCAの新プログラム、「サタデースクール」が5月13日(土)開校しました。このプログラムは、月に1回、学校の休みの土曜日を利用して、大学生のボランティアリーダーと共にいろいろなことに挑戦してみようという、体験学習の学校です。今回のテーマはクッキング。男の子もエプロン姿で、クッキー作りを体験しました。

母の日のプレゼント

サタデースクール、第1回目の活動は女子2名、男の子4名の計6名の子供たちが参加して行われました。県立大学社会福祉学部2年の、太田路子リーダー、山口文子リーダー。同大学看護学部3年の青柳里子リーダー、岩手大学工学部大学院の星合暁宏リーダーが、先生役です。少々、怪我をしても、オープンが壊れても、看護婦とエンジニアの卵がいるのだから、安心、安心。

当日は、朝から大雨、中津川サッカークラブ、ベストキッズのある日でしたが、雨と川の増水のため、サッカークラブ、ベストキッズの練習はお休みとなり、サッカー担当の大槻リーダー、斉藤リーダー、金野リーダーらも合流し、賑やかなクッキー作りになりました。

子供たちが思い思いに心を込めて作ったクッキーはきれいにラッピングされて、メッセージカードが添えられ、母の日の素敵なプレゼントに仕上がりました。



次回のサタデースクールは実験！！

「石鹸を作ろう」

6月10日(土) 10:00AM~12:00PM

参加費:1000円

O.Jの ワンポイントバイブル講座 EDUCATION(引き出す)

以前に読んだ本「アユの話」に興味深いことが書かれていました。琵琶湖に生息するアユが小さいので、そういう品種であろうと思われていたところが、このアユを多摩川に放流したところ、大きく育ったので小さい品種ではないことがわかったそうです。

この本で私は深い感激を与えられました。豊かな精神的な糧が与えられ、良い教育がなされる時、人間は周囲の者を驚かせるほどの成長をとげることができます。その反対の場合は、大きくなるべきものの成長が止まってしまう。ということは、親のしつけ、責任(親とは、父親と母親のこと)また、教育にたずさわるものの責任がどんなに重いものであるかをこの本は

語っていると考えます。



赤ん坊は世界のあらゆるものが自分のためにあると思っ

ています。ところが自意識が発達して自分と自分の外の世界の区別がつくようになると、自分が世界の中心ではないこと、他人には、その人なりの考えがあることがわかってきます。自分を喜ばせるために世界があるのではないことがわかってきます。そうしてついには自分は世界に仕えるためにあることがわかるのです。

本当の成長、本当の大人とはどのようなものかと考えるとき、聖書の御言葉を思い出します。「なにごとでも人々からしてほしいと望むことは人々にもそのとおりにせよ」とイエスは言われました。友人のいない淋しい人、身体が弱くて勉強が遅れがちの人がいるとします。成長している心を持っている人は、もし自分がその人の立場であれば、親切に付き合ってくれる人、丁寧に勉強を教えてくれる友がいれば幸せだろうと思うのでそうするでしょう。ところが人間は不思議なもので自分だけを幸せにしようとするとき、本当の幸せは来ないの反して、他の人のためにいろいろと親切をつくし、他人の悲しみを悲しみ、喜びを喜びとすると、本当に幸せになるものです。

(盛岡キリストの教会 牧師 小田島勝也)

新シリーズ お母さんの必殺技！！④

お母さんの必殺技も4回目を迎えます。今回は、鈴木遼くん(水泳教室のメンバーです。)のお母さん、鈴木香葉子さんに愛読書を紹介していただきました。



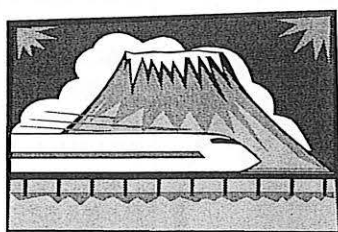
武田 百合子

(たけだ ゆりこ)

大正14年(1925)、神奈川県横浜市生まれ。旧制高女卒。昭和25年、故武田泰淳と結婚、一女をもうける。口述筆記をしたり、車を運転して取材旅行に同行したり、夫の手となり足となっていたが、夫の没後「海」に「富士日記」を連載、昭和52年、田村俊子賞を受賞。竹内好と武田夫妻の3人でのソ連旅行記「犬が星見たーロシア旅行記」で、昭和54年、読売文学賞を受賞。



富士日記は中央公論社から文庫で出版されています。



「富士日記」～武田 百合子さんのこと～

武田 百合子さんをご存知の方は多いかも知れません。

作家である夫・武田 泰淳氏と共に過ごした富士山の山荘での13年間の日々を綴った本が、富士日記です。もちろん人に読まれることを意識して書かれたものではありません。山の日々の暮らし…その日の買い物やら献立やら、山暮らしの中で知り合った人々との交流や、季節の移ろいの中で死んでいき、生まれてくる花や虫たちのことなど…を淡々と地に足のついた生活者の目で記録しています。

武田 百合子さんの、無垢で天真らんまんでまっすぐ物事の本質を捉える、それでいて温かいまなざし。その人柄に惹かれるのだと思います。

この日記が書かれ始めた昭和30年代の終わりから昭和40年代前半の頃、私はちょうど小学生でした。(年がバレますね) 元気だった頃の父がいて、母や兄、姉との、のほほんとしあわせだった子ども時代を思い巡らせてしまいます。

本を読むと、もう40年近くも前のことなのに百合子さんと泰淳氏のその時の会話やシーンが、鮮やかに目に浮かんでくるようです。

この本との付き合いはもう20年近くになるでしょうか。時々ふっと武田 百合子さんの世界に浸りたくなくて、飽きることなく何度も読み返してきました。百合子さんの作品は他に、ロシアを旅した時の出来事を綴った「犬が星見た」、「ことばの食卓」、「遊覧日記」、最後の本となった「日雑記」があります。

1993年、百合子さんは奇しくも泰淳氏と同じ病気で世を去りました。百合子さんの新しい本はもう読むことはできませんが、これらの本をこれからも宝物のように読み続けるのだらうと思います。

YMCA5月の予定

5月11日 (木) ユースサッカー
5月13日 (土) サタディスクール 10:00～12:00
5月13日 (土) ベストキッズ 14:30～16:30
5月28日 (日) アドベンチャークラブ/ベストキッズ